

源氏物語 千年の時

森 正 人



今年2008年は源氏物語が世に現れてから1000年という節目に当たります。正確に言うと、ちょうど1000年前に源氏物語が文献に登場したのです。

事情を少し具体的に説明しましょう。寛弘5(1008)年9月11日、中宮彰子が一条天皇の皇子を出産しました。所は土御門殿、彰子の父である藤原道長の邸宅です。左大臣道長にとっては待望の男児で、将来は皇太子となり、そして天皇の位を継ぐことが期待され、政権の基盤をいっそう強固なものとする慶事となりました。誕

生に伴う儀式や祝賀の催しがうち続き、50日めは11月1日で、右大臣、内大臣をはじめ貴族達を招き、とりわけ盛大な祝いの宴が土御門殿で催されました。

これら一連のできごとは、一人の女性の手によって記録されています。紫式部日記です。日記とはいえ、個人的なものでなく、紫式部は彰子に仕える女房としてこの一大慶事を公的に書き残すという任務を帯びていたとみられます。

源氏物語のことは、その五十日の祝いの酒宴の席、身分の高い貴族達も酔い痴れて、歌う者あり、几帳の布を引きちぎっては女房達に近づこうとする者あり、座もすっかり乱れた様子が活写されているところに、さりげなく挟み込まれています。

左衛門の督、^{かみ}「あなかしこ、このわたりに若紫やさぶらふ」とうかがひ給ふ。源氏に似るべき人も見え給はぬに、かの^{きんとう}上はまいていかでものし給はんと聞きみたり。

(左衛門の督藤原公任が、「恐縮ですが、この^{きんとう}辺に若紫はおられるか」とお覗きになる。光源氏に似ているような人もいらっしゃらないのに、ましてどうしてそういう方がいらっしゃるだろうか」と、私は聞いていた。)

一瞬喧噪が遠のき、ここだけしんとした空気が包む、そういう場面です。藤原公任という人は、家柄もよく、地位も高く、和漢の学才にすぐれ、当時第一級の文化人でした。それほどの人から「あの若紫の物語を書いた作者はいらっしゃるか」と声をかけられるのは、並一通りでなく晴れがましいことのはずです。たとえば清少納言なら、きっと気の利いた言葉を返したにちがいありません。その場ではただおし黙って聞いていた、しかしこのように記述することによって内心の反撥を隠そうとしないところには、控えめであっても自ら^{たの}恃むところの多い人柄がうかがわれて、源氏物語の作者ならではのという感を深くします。

この記事によって、源氏物語がたしかに紫式部の作であること、この頃は若紫の巻はもちろん、少なくとも、若紫の巻で見いだされた十歳ほどの少女が、紫の上として光源氏の正妻格となったあたり

までは書かれていたと推測されるわけです。

しかし、ここで、源氏物語は有名な古典には違いないけれども、1000年も前の作品ではないか、むずかしい古文で書かれているし、それが現代の私たちに何の関係があるのか、という言葉が返ってきそうです。文章と言ひ、長さと言ひ、たしかに源氏物語を読むのは容易ではありません。難解であると感じるのは、実は現代人だけではなかったのです。早くも平安時代末には注釈が書かれ、以来注釈書を始め、批評、系図、年表、梗概書（ダイジェスト）などが多数著されて今日に及んでいます。

1000年前に源氏物語が書かれたということは、日本文学史上の大きなできごとですが、それに劣らず、否それにもまして、それぞれの時代の多くの読者が読み継いできたということが重要だと私は考えています。読み、調べ、考え、味わうという行為もまた文学的な営みだからです。源氏物語は、時代が降るにつれて読者を拡大してきているのです。そして、今や海外にも。

源氏物語はそれ自体が読まれただけでなく、次代の作家たちの創作意欲を喚起し、次々とその影響下に新しい物語を生み出しました。狭衣物語、寝覚物語、浜松中納言物語、等々。また、源氏物語の方法や文体を借りて歴史を記述する栄花物語のような作品も出現しています。それにとどまらず、源氏物語はジャンルを超えて影響を及ぼしました。すなわち、藤原定家、藤原良経など鎌倉時代以降の歌人達は、源氏物語の場面をふまえ、物語中の和歌を取り込み、用いられている言葉を引用して、批評性と含蓄に富む新しい和歌を詠むようになりました。そうした創作方法は、連歌にも引き継がれ、源氏物語は文学に携わる人々が共有する文化の源泉となりました。注釈書や梗概書は、こうした人々に利用されたのでした。

源氏物語の世界は、室町時代に大成した能にも取り入れられました。「葵^{あひのうえ} 上」「夕顔」「浮舟^{たまかつら}」「玉 葛^{たまかづら}」「野宮」など、登場人物や物語の舞台となった場所を曲名として、これらの題を聞いただけで、源氏物語の世界を想起できる作品が作られ、今日もよく上演されます。このほかに逸することのできないのが、徳川黎明会蔵、五島美術館蔵の「源氏物語絵巻」（国宝）を始めとする源氏物語絵の数々です。

このように思いつくままに拾い上げるだけでも、源氏物語が日本文化のさまざまな領域に及んでいることが分かります。源氏物語そのものもさることながら、1000年にわたってこれを享受してきた人々の営為、それを通じて生み出された文化の深さと広さに思いを致さずにはられません。源氏物語とは、紫式部が作ったすぐれた物語であるとともに、それを享受しつつつけてきた歴史の総体でもあるといえましょう。

こうした考え方に沿って、附属図書館恒例の貴重資料展に、平成20年度は源氏物語とその関連資料を展示することを企画しました。附属図書館には、熊本藩主であった細川家の蔵書と藩政史料を中核として形成された大コレクション 永青文庫の資料が寄託されています。細川家の祖・藤孝^{ふじたか}（号は幽斎、



源氏物語丹緑本(部分)

1534～1610年)の執筆、書写あるいは収集した書籍をはじめ、豊かな源氏物語関係資料が含まれています。これに、昨年本学が寄贈を受けた仲光家文庫を含む附属図書館の資料、文学部日本語日本文学研究室所蔵の資料を加えて、展示を行います。

展示の最終日には、源氏物語に関する公開講演も行うことにします。

源氏物語原文を読むにはむずかしすぎて手がでない方にも、また現代語訳を読むにも時間がないと言われる向きにも、日本文化の歴史の一端に触れていただく機会にさせていただければ、と願っています。

もり まさと 文学部教授



● 熊大生selectionを公開

図書館にあったらいいなと思う本を熊大生自身が推薦する“熊大生selection”で購入した本(今回は311冊)の貸出がいよいよはじまりました。新年度になればまた募集を開始しますので、ご協力をお願いします。これからの展開をお楽しみに。

● 「仲光家文庫」を寄贈

10月2日(火)、森鷗外の『阿部一族』に名の挙げられている旧熊本藩士であった仲光家に伝わる古文書および典籍類が、山下(旧姓仲光)一恵氏から寄贈されました。今後の歴史ならびに文学研究の進展に大いに寄与するものと思われます。

● ハーン顕彰講演会を開催

12月3日(月)にラフカディオ・ハーン(小泉八雲)の業績を顕彰する講演会が中央館二階会議室で開催されました。

□ ハーンの異文化理解

講師：福澤 清 文学部教授

□ 附属図書館所蔵の「木下順二が丸山学に送った書簡」について

講師：西川盛雄 教育学部教授

● 松井文庫目録などを提供開始

▽ 旧熊本藩の城代家老、八代城主松井家に伝わる古文書類の内、冊子体文書について「松井文庫目録 一」として公開しました。

▽ 熊本県立美術館との共同事業の成果を元に『阿蘇家文書』を公開しました。

▽ 旧制五高の校友会誌『龍南会雑誌』を熊本大学学術リポジトリに登録する作業を開始しました。